



Data

監督：ロネ・シェルフィグ
 原作・脚本：デイヴィッド・ニコルズ (ハヤカワ文庫刊)
 出演：アン・ハサウェイ/ジム・スタージェス/パトリシア・クラークソン/ケン・ストット/ロモラ・ガライ/レイフ・スポール/トム・マイソン/ジョディ・ウィテカー/ジョージア・キング

👁️👁️ みどころ

聖スウィジンの祝日は7月15日。その日だけに焦点をあてた男女の成長と恋の物語は、多分本作がはじめて！「誰かと寝るといつも笑うか泣くかよ」「僕らは友達でいよう」、この言葉が15年以上縛ることになろうとは・・・。

そんな2人にずっとイライラ。そしてひと安心。しかして大団円かと思うと、あっと驚く結末が・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こんな視点からのラブストーリーは、多分はじめて！■□■

大学を卒業し、それぞれの道を歩み始めた男女が、どこでどんな接点を持ち、ある日結婚まで？あるいは墮落を？どちらに転ぶにしてもそんな場合、柴田翔の小説『十年の後』（1966年）に代表されるように、10年後が1つの目安だが、本作では23年後にやっと・・・？日本では2月14日のバレンタインデーは女性から男性へチョコレートを贈り愛を告白する日として定着し、商売のネタになっているが、本来その日は紀元269年にローマ教皇の迫害下で聖ウァレンティヌス（テルニのバレンタイン）が殉教した日。それと同じようにイギリスには、「聖スウィジンの日が雨ならば40日間、雨つづき 聖スウィジンの日が晴れならば40日間雨はなし」という「聖スウィジンの祝日」があるらしい。

本作の原題『One Day』のワン・デイとは、この「聖スウィジンの祝日」である7月15日のこと。そして本作は、大学の同級生エマ・モーリー（アン・ハサウェイ）とデクスター・メイヒュー（ジム・スタージェス）が卒業式のパーティー後、酔った勢いで（？）2人がベッドの中で過ごした7月15日を起点とし、以降7月15日のみに焦点を当てて2人のラブストーリーを描いていく。邦題のサブタイトルはそれが23年間続いた

ことを示しているから、22歳で大学を卒業した後45歳まで23年間の7月15日が描かれることになるわけだが、私が知っている限り、こんな視点からのラブストーリーは多分はじめて！さすが『17歳の肖像』（08年）（『シネマルーム24』20頁参照）でヒロイン役を演じたキャリー・マリガンを、第82回アカデミー賞主演女優賞にノミネートされるほどの女優に引き上げたロネ・シェルフィグ監督の着眼点に拍手！

■今では、こんな会話は天然記念物？■

本作前半のポイントは、卒業式の夜のパーティーが終わった後、デッカイ眼鏡をかけたいかにも頭は良さそうだが聖物の女子大生エマが、いかにも自由奔放な遊び人学生のデクスターを、酔った勢いでアパートに誘うストーリー。誰もが開放的になる卒業式の夜にはどこの大学でもよくある風景（？）だが、さらなるポイントは、互いに下着一つになってベッドに入った後、エマが言う「誰かと寝ると、いつも笑うか泣くかよ」のセリフ。

これは、一方ではエマが初体験ではないことを自白するとともに、他方ではその方面に疎いことを自白しながらも今勇気を出してさらなる1歩を踏み出そうとする決意を伝えるもの。こんなことを言われたら普通の男は、面倒くさいことを言う女だナアと考えて腰が引けて帰ってしまうか、それとも理屈はどうでもいいからとにかくやっしまえ、となるかのどちらか（？）だが、さすが遊び人のデクスターには余裕がある。すなわち、そこのデクスターの答えは、「僕らは友達でいよう」というものだった。私の大学時代にはまだまだこんな会話があったと思うが、今ではこんな会話は天然記念物・・・？



『ワン・デイ 23年のラブストーリー』6月23日（土）TOHOシネマズ梅田ほか全国ロードショー

■このバカンスは???原作は?脚本は?■

大学卒業後の一年一年なんて、それぞれの仕事に夢中に取り組んでいる新社会人にはアツという間に過ぎ去っていくもの。しかし、デクスターはテレビ局でプロデューサーの見習いという半分ヤクザな仕事(?)だし、両親が裕福だったから、恋人を取っかえ引っかえしては遊んでいるようだ。逆にエマは作家なんて夢のまた夢で、メキシコ料理店のウェイトレスというしがたいバイト仕事から抜け出せないでいた。そんな中、1992年の7月15日に「気分転換に」とデクスターがエマを誘ったのは、2人きりのバカンス。デクスターの方はこの際エマをモノにしてやろうという魂胆があることはミエミエだが、エマの方は行きの車の中で2人きりのバカンスを過ごすについて「守るべきルール」を真剣に提示! そりゃ、いい友達であるためにはエマの言うルールもわからないではないが、さて現実は何?

本作の原作はデイヴィッド・ニコルズという1966年生まれの作家が書き、イギリス・イタリア他各国でベストセラー・ランキング1位になった小説らしい。脚本も同人が書いたわけだが、大学を卒業してから4年も経っているのに、しかもこのバカンスでエマはデクスターに対して「ずっと前からあなたに夢中だったの」と告白しているのに、エマはなおこんなルールを守ることにこだわっているの? 女性作家の原作なら「なるほど」と思わなくもないが、こんな微妙な女性心理の奥底を男性作家が描き脚本化したことにビックリ。

■この女(男)もいが、互いの本命は・・・?■

ロミオとジュリエットのように出会った瞬間から互いに恋に落ちてそれを告白し合うこともあれば、互いに「本命」だと思いながらそれを口に出すことができず、2人とも「別線」に走ることもある。大学卒業後の7月15日の過ごし方を見ていると、デクスターとエマのケースがまさにそれだとわかるが、この2人は最初の7月15日に「僕らは友達でいよう」と約束しているだけに、本命の告白がなおさら難しいことに。

その結果、今や低俗TV番組の司会者が板についてきたデクスターは、もともと遊び人だっただけに女は周りにいくらでも。しかし、今は番組に出演しているモデルのシルヴィ(ロモーラ・ガライ)と付き合っているから、いずれ結婚に……。他方、もともと地味なエマは、メキシコ料理店で一緒に働き今はコメディアンを目指している男イアン(レイフ・スポール)の優しさに心の安らぎを求めている。スクリーンを観ている観客はもちろん何より当の本人たちが、本命はこの女(男)で、シルヴィ(イアン)は別線の女(男)だとわかっているのに、互いにそれを心の奥底に秘めたまま毎日の生活を続けているわけだ。しかし、そろそろ節目の「10年後」だが、2人は……?

■節目は「8年後」と「12年後」、そして「15年後」■

私の見るところ、この2人の節目は「8年の後」と「12年の後」、そして「15年の後」だ。まず、8年後の1996年の7月15日。イアンと同棲生活を送るエマは久しぶりにおしゃれなドレスを着てデクスターとのディナーに出かけたから、この気持をデクスターが確かむことができたら・・・？ところがデクスターは酔っぱらってふざけてばかりだったから、得るものは何もなし・・・。次に12年後の2000年の7月15日は、互いに距離を置いていた2人が友人の結婚式に出席したことによって再びヨリを戻すチャンスだったが、ここでも2人は「もう消えないでね」「君も」と奇妙な確認をただけに。

しかして、最大の節目は15年後の2003年7月15日にやってきた。この時エマは児童書作家として成功し、フランス人の恋人と共にパリに住んでいたが、デクスターはそんなエマを訪れることに。男だって女だってホントの「友達」関係だけならともかく、内心では本命と思っている相手が自分とは違う異性と恋人同士になっている姿を見るのは気分の良くないもの。この時、既にシルヴィとの結婚に失敗し、パワになっていたデクスターだったが、目の前にエマの恋人を見ればその心が千々に乱れたのは当然だ。ここまで来れば2人は決定的に決別！本来そうなるところだが、さて現実には？長い長いすれ違いの時代を経て、やっと2人は・・・？

■□■こんな結末を誰が予想・・・？■□■

本作は107分の映画だが、フラッシュバックの手法を全く使わず、時系列に沿って進むため2人の生活ぶりや心のあり方は観客にそのまま伝わり、感情移入のしやすい映画になっている。そのため、前半から中盤にかけての2人のすれ違いぶりにずっとイライラしていた私たちは、35歳くらいになってから2人の心が素直に結び合ったことに安心し、2人の結婚とその幸せを願うことになるのだが、さて本作にはどんな結末が・・・？

セシリア・チャンという美人女優が主演した香港映画『忘れえぬ想い』（03年）は、冒頭恋人であるミニバスの運転手が交通事故によって死亡する衝撃的なシーンから始まり、その後健気にも恋人の子供を育てながら自らミニバスの運転手として生きていく彼女の姿を描いた涙、涙の感動作だった（『シネマルーム17』186頁参照）。また、塩屋俊監督の『0（ゼロ）からの風』（07年）（『シネマルーム15』214頁参照）やテリー・ジョージ監督の『帰らない日々』（07年）（『シネマルーム20』133頁参照）も、突発的な1つの交通事故から生まれる人間ドラマを描いた名作だった。

本作のあっと驚く結末についてはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、以上は余計なおせっかいとわかりつつ、私なりの一つの視点を・・・。

2012（平成24）年5月30日記